
文化的視点から見るホテル：研究経過報告*¹

Hotel as a Public Sphere — On Grand Hotels in Asia

梶原 景昭

Kageaki Kajiwara

Abstract:

This research project is a preliminary attempt to launch hotel studies from cultural perspective. Hotel has been a research theme mainly from the field of tourism, hospitality industry and business management.

This research, however, concentrates first on the nexus between courtly life style / that of bourgeoisie and hotel life in so-called Grand Hotels, through bibliographic studies. Second, through participant observations, I would delineate aspects and factors found in hotel amenities and services which may constitute trend-setting life style, today. Third, an attention is to be paid to a function of hotels which configulates a form of life. Everyday life, in general, is amorphous. But breakfast, bathing, bedding, and arrangements of a room in hotels have certain fixed forms. Accordingly, I try to shed lights on the life configurative / ritualizing potentials of hotels.

The above outlines in mind, N. Elias, W. Sombart, E.R Leach and M. Foucault would be sources of inspiration for this kind of a new hotel study. Through field studies at the Oriental (Bangkok) and the Peninsula (Hong Kong), a tentative conclusion is the following; these two Grand Hotels maintain their standard by transforming material resources, such as facilities and amenities into symbolic resources, and vice versa. The smooth trade-off / transformation, i.e. boundary crossing between materials and immaterials, modern and traditional, local and global, might be deep-rooted in the essential nature of Grand Hotels.

Keywords: Grand Hotel, ritualization, life style, modern institution, civility

キーワード：グランド・ホテル、儀式化、ライフスタイル、近代の制度、礼法

はじめに

表題の研究プロジェクトを構想するに到った背景には、マクロ的な社会状況の変化、産業構造の転換、そしてライフスタイルの多様化から個々人の選択や嗜好の変化、物的商品からサービス重視への需要の変容など、現代社会の様相に対するささやかな関心と考察が存在する。また後に述べるが、ホテル（とくにいわゆるグランドホテル、今回はバンコクのオリエンタルと香港のペニンシュラという2つの頂点ホテルをとりあげた）が提示する、おそらく前近代に端を発する宮廷風のライフスタイルや、そのブルジョワ的変異形、が形を変えて、今日でも依然として我々のとりとめのない日常生活に形を与える手がかりになっているのではないかという、回顧的関心も潜在している。さらには監獄、軍隊、学校、病院など同様に「近代」の「制度」といってよいと思われるホテルについては、前者の研究に払われた関心や、そしてそこで採用された視角の不在が強く感じられることもこうした研究に着手した理由である。

本研究プロジェクトでは、先に述べた関心について、文献研究を始めるとともに、今日のホテルが現代のライフ・スタイルをどのように形造っているかに焦点をあてた初期的な実態調査を実施した。対象が複雑であり、また初年度でもあって、これまでに得られた知見はごくささやかなものであるが、ここに謹んでご報告することにした。

ホテルに対する関心には、演出された厳粛さや儀式にともなうしかめつらしさを笑いのめし、相対化したいという欲望と、それでもある種のホテルくらいしか現代社会の安らぎと快楽を、瞬間的にせよ、虚構であれ、味あわせてくれない、といったアンビヴァレントな感情が潜在している。

1. 研究の背景

急速な経済成長期を経て、いわゆる「成熟」社会が到来すると「モノ余り」の状態が訪れ、大量生産および大量消費の時代が終わるといわれる。モノが普及し、新しい需要がかつてのように創出されぬ時代を迎えた日本社会でも、ここ十年ほどサービスの質やサービスを超越するホスピタリティへの関心が強まってきた。モノではなく「もてなし」や「心の豊かさ」が新しいビジネス動向や社会の需要を示すキー・ワードとなってきたのである。山崎正和のいう「必需品なき消費社会」という考え方にしたがえば、上で述べた「ホスピタリティ」や「もてなし」の模範的モデルとして老舗の高級旅館や、伝統あるホテルにあらためて関心が高まったのが現代といってよい。実務的なビジネス書の分野では、フォー・シーズンズやリッツ・カールトンの「接客術」が、また加賀屋の行き届いたサービスのあり方が喧伝されるようになった。^{*2} さらにこうした変化の背景にはいわゆるサービス産業が拡大するという産業構造の変化や「知価社会」（堺屋太一）を強調する議論の存在がある。

以上の背景は二つの意味で本研究の発元に影響を与えている。まず第一に、筆者は大筋でのそうした議論や変化を一定程度承認しており、社会の側にもそのような需要（創られた需要も含めて）があり、またビジネスの側もサービス／ホスピタリティ産業のさらなる開拓と創出に力を注いでいることは状況的に明らかである。第二の意味は少し異なる。ビジネスや社会の趨勢としてそうした産業分野の拡大やサービスに対する人びとの関心を状況的に、また現代の言説のひとつとして認めたいうえで、しかし拭い去ることのできぬ違和感が残る。ひとつにはあまりにもステレオタイプ的なもてなしが喧伝されたり、ホスピタリティが押し付けになってしまっ、こうした文化の洗練され

た部分というべき領域がまったく正反対に感じられるという圧倒的な違和感のことである。また、ホテルという制度や「もてなし」が提示する人類的な慣習としての拡がりについて、ビジネス学的探求が（それはいずれの分野にもありうる限界ではあるのだが）まったくといってよいほど言及しない点にも明らかである。けれどもその点は逆にいえば、文化をめぐる研究分野がこの時点でこのような現象に十分な注目を払っていないという欠落でもある。以上の欠落を補うささやかな試みとして、本研究が計画された経緯がある。

2. 研究の視角

まずはじめに注目した点は、ホテルという制度が、通常はとりとめのないといえぬ我々の日常生活に一定の形式を与え、あるいはその「儀式化」を行うという仮説的な考えである。例えば「朝食」は、それぞれの家庭によって何らかの「形」は存在するかもしれないが、前夜の残り物でもよいし、たいていの場合、我々のふつうの朝食は一定以上の水準のホテルが供する朝食の形式や多様性には及ばない。「入浴」についても、ホテルでの「入浴」を成立させる空間（浴室）、入浴剤、入浴塩、石鹸、シャンプー、ボディ・ローション、タオル各種、バス・タブ、足ふき、バス・ロープなど、一級ホテルの「入浴」を構成する要素・物品と諸概念によって、ホテルのそれは、家庭でのふつうの入浴とは一線を画すものとなっている。

こうした生活の「形式化」や「儀式化」に歴史的な示唆（いやそして社会的な）を与えてくれるのがN・エリアスの『宮廷社会』*³である。彼の述べる「極端」な儀式化、は王を頂点とする社会的位階制度の維持機構であり、かつ位階制度そのものの体現といってよいが、そのもっとも顕著な例が国王の「朝の引見」（起床）の儀式である。エリアスによれば、国王を起こすのは寝台の足許に寝ている近侍長で、王のまわりに控える小姓それぞれには厳密な役割分担がある。また王の家族、王が認めた貴族、侍医長、侍従長、高位の軍人、一部の役人などにのみ王の寝室への「入室特権」が認められていたという。王の着替えも細かな規則にもとづいて、「衣裳室長が国王の寝間着の右の袖をはずし、衣裳室付の第一の召使いが左の袖を持って脱がせた。」「*⁴とされている。すこし長くなるが宮廷社会の特徴としてエリアスが述べる重要な点は以下のようなことである。すなわち国王の朝の起床の儀式に明らかなものは「この機構のいたましいほどの厳密さ」*⁵であり、「近代的意味における合理的機構ではなくて、ひとつひとつの儀式が、その都度その都度の権力分布の象徴として進行手続きと結びつく威信的性格をもつ機構だったのである。」「*⁶という。通常的生活ではきわめて私的な行為である起床や食事、あるいは会話すら、家産制ということからは当然ではあるが、国王によって「位階の違いをつくり出したり、栄誉や恩恵を与えたり、また場合によっては不興を伝えるため」*⁷に利用されたという。こうした社会では「礼儀作法が極めて重要な象徴的機能を持っていたのである。」「*⁸という点は、ホテルにおける行動様式、プロトコル、形式性のあり方も構造的にも、あるいはその歴史的な先行形態という意味でも示唆的である。さらに生活の「儀式化」に加えて「威信の表示」という点で宮廷社会は近代のグランド・ホテルにとって範例的な対応物であろう。

エリアスの描くブルボン王朝の宮廷社会では、宮廷貴族は「ヴェルサイユ宮殿のなかに部屋を持つと同時に、パリ市内に住居、つまり『邸宅（オテル）』を持っていた…。」*⁹ こうした邸宅はもちろん「私室」を含むものであるが、エリアスによれば「個人住宅」ではあるものの、職業上、社交

上の機能もあわせ持っていたという。これは現代のホテル（オテル）における「公」と「私」の区別のあり方にも通じる点をなしとはしない。また当然ながら身分制を枠組とする宮廷社会は位階、威信、そしてそれにとまなう「排除」を特徴としていた。大衆社会の到来によってホテルは「開かれた」場所とはなったが、その反面「エクスクルーシヴ」な性格が巧みに維持され、またその点がグランド・ホテルという審級を示唆している。宮廷が持っていた「模範的中心」という性格がグランド・ホテルにそのまま受け継がれているわけではないが、両者の接続について検討することには十分な意味があろう。宮廷社会が示す「いたましいほどの厳密さ」や「規則にがんじがらめ」という点そのまま同じ程度に現代にホテルに反映していると言いたいのではない。エリアスが本研究にとって示唆的であるもうひとつの点は、彼の言う「文明化の過程」なかんづく「礼儀」や「作法」の問題とあってよい。食事や寝室の作法が形造られてゆく過程や場の現代的な発現としてホテルが果たす役割にはきわめて大きいものがある。

さて奢侈と資本主義の発展について論じたゾンバルトの所説^{*10}も間接的ながらホテル研究に示唆を与えてくれる。彼は、「都市のなかの奢侈」として例示するいくつかの制度（たとえばミュージック・ホールや高級レストラン）のひとつとして、ホテルを取り上げている。また「封建的な財貨」が「近代的財貨」へと変質してゆくなかで、近代ブルジョワジーのライフ・スタイルに対して貴族社会のそれが相同性と接続性すら示していることについても注目に価する見解を示している。ブルジョワの生活様式の本格的な検討を行うことも本研究のいまだ手つかずの課題となっている。

ところで、Y・ロートマンによるロシア貴族についての著作のなかで触れられている「生活のなかの演劇性」^{*11} という視点もホテル研究にとって有益であろう。彼が取り上げているのは舞踏会、求婚、結婚、離婚、決闘、トランプゲームなどであるが、当時の貴族社会についてつぎのように述べている。

「18世紀から19世紀初頭にかけてのロシアの首都の貴族の生活においては、時間は大きく二つに分かれていた。すなわち、家庭にいる時間は、家族や家政のことを気遣い私人としてふるまっていたのにたいして、もう半分の時間は、軍人や文官としての勤務にあてられており、この間は貴族は忠臣として行動し、他の階級とは異なる貴族階級の代表者として、君主と国家に仕えていた。こういったふたつの行動形式の対立が取り除かれるのが、その日を有終の美でしめくくる『集まり』、つまり舞踏会や夕べの招宴であった。ここでは貴族ならではの社会的生活が実現されていた。彼は、私生活における私的人物でもなければ、国家に仕える役人でもなかった。彼は貴族的集いのなかにいる貴族であり、仲間たちに囲まれたみずからの階層の人間であった。」^{*12}

ここに示された公と私、緊張と弛緩の境いめ、あるいは接点はまさに「社交」であり、またそうしたことを実現する時空間のあり方とあってよい。すなわち「舞踏会は、一方では、勤務に対立する領域——くつろいで交際したり、上流階級ふうにあらぐための領域であり、勤務上のヒエラルヒーの境界が弱まった場所——となっていた。」^{*13} とともに、「だが他方では、舞踏会は社会的代表としてふるまう場、社会的な組織化の形式でもあり、当時のロシアで容認されていた集団的生活様式の数少ない形式のひとつであった。」^{*14} というロートマンの記述は、いささか強引のそしりを免れえないが、社交を可能にするホテルの時空間のあり方と適確に重なりあう。

さて、この小論の冒頭で日常生活の「形式化」「儀式化」という観点からホテルの意味と機能を

捉えたが、こうした点については、E.Rリーチの所論がひとつの水準を示しており、参考となる。^{*15}リーチの儀礼・儀式化をめぐる見解はつぎのとおりである。彼はデュルケム流の聖俗二元論的な、儀礼的行動と技術的行動を二分するのではなく、人間行動全体を連続体として捉え、「穴を掘る」ような純然たる技術的行動から宗教儀礼のような儀礼的行動まで、グラデーションのちがいに着目する。同時に（１）技術的行動（特定の目的があり、行動の結果が合理的因果として観察可能なもの）、（２）伝達の行動（因果間に機械的連関はないが、文化的に定まった伝達コードによる連関のある、伝達の行動）、そして（３）「呪術的行動」（合理的—技術的に有効ではなく、ある種のオカルト的な力を生み出す行動）の３タイプのなかで、（３）のみならず（２）も儀礼的行動であるとみなす。とくに（２）の伝達のないし表現的行動を儀礼の範疇として捉える点が重要で、先に述べたように、朝食にしろ入浴にしろ、宮廷社会でのあり方に近似して、ホテルでのそれらもたんなる基本的欲求の充足（食欲、栄養摂取、清潔さ）にとどまらず、社会的威信や趣味、センスを表象する行為となっている。ただ現代のホテルでのそうした生活行為は、かつての宮廷のそれらが表象した身分や威信よりも（そうした要素が消滅したのではないが）、個々人の趣味やセンスを表現する伝達・表象行為となっている。儀式化という点についてはさらに、「公共空間での自己呈示」をめぐるI.ゴフマンの議論にも注目する必要がある。

そしてM. フーコーがあざやかに示した近代的制度の誕生、就中代表例である「監獄の誕生」と「規律・訓練」の強調についての議論もホテル研究に示唆するところが大きい。^{*16}たとえば規律・訓練が用いる技術として「空間への個人の配分」に関する記述がある。彼によると近代は「放浪者および貧民の大いなる『閉じ込め』」^{*17}や「寄宿制度が最も頻度の高いものではないにせよ少なくとも最も完璧な教育制度として出現」^{*18}し、兵営は「一般兵士を『秩序と軍律』のなかに保持した」^{*19}という。病院や監獄の「閉鎖性」を「安らぎ」や「くつろぎ」を旨とするホテル空間と短絡させようということではない。しかし修道院や学校にみられる「時間割」（時間の秩序化）はホテルにおいても無縁ではないし、宿泊規則や約款の示す秩序といった点でホテルもフーコーの言う「近代の制度」の側面を当然のことながら体現している。ここで参照した「監獄」はホテルとは対蹠的と見えるが、構造的な相同性を見出す可能性があり、この点は今後のさらなる検討を期したい。ゆったりとしたグランド・ホテルには当てはまらないが、N.S. ハイナーが描く合衆国の大部分のホテルの光景は当たらずとも遠からずであるといえそうである。^{*20}

最後に「コロニアル」な問題に関する視角について触れたい。本研究が直接的にとりあげるのはアジアのグランド・ホテルであり、また初期のアジアのグランド・ホテルはほとんどの場合植民地状況と無縁ではない。植民地状況のひとつの具現は、宗主国と植民地の同時代性や、あるいは植民地の「先進性」といってよい。グランドホテルの場合には、興味深い同時代性が見られる。19世紀の中葉にはセイロン（当時）にタクロベーン・ホテル（コロンボ）、ゴールフェイス・ホテル（コロンボ）が、それに先立ってスイス・ホテル（キャンデイ）が開業している。合衆国の草設期のホテル、たとえばウィラード（ワシントンDC）の開業は1850年であり、ボストンのパーカー・ハウスは1855年となっている。規模や設備の面で差がないわけではないが、きわめて早い時期にグランド・ホテルが植民地に出現している。ヨーロッパの場合、ヴェニスにダニエリ（1822年）、ローザヌのポー・リヴァージュ・パラス（1861年）であり、大都市の本格的なホテルとなると、サヴォイ（ロンドン）は1889年、グランド（ローマ）1894年、コンノート（ロンドン）1897年、クラリ

ッジズ（同）1898年であり、パリのリッツの開業も同年である。植民地が一つの実験場として宗主国本国にも実現されていない新しい制度や技術を試行した事例もあるので、ホテルをめぐるこうした点についても検討事項の中に入れてたい。

3. 調査地の概要

今回の実地調査の対象としたのは、マンダリン・オリエンタル（バンコク）とペニンシュラ（香港）の両ホテルである。いずれのホテルもアジアを代表するグランドホテルとして高い評価を得ており、長い歴史を誇るとともに、現代の上級ホテルのモデル・ケースとされる。

（1）マンダリン・オリエンタル^{*21}

創業は1876年といわれるが、その前身も含めるとさらに長い歴史をもつ、東南アジアを代表するグランド・ホテルといってよい。当初はデンマーク人の船員が河畔の小ホテルを買収し、やがて同国人のアンデルセンがビジネスパートナーとともにアンデルセン商会を設立、ホテルの本格的経営に乗り出したといわれている。1885年にイタリアの建築家の設計によってホテルの建て替えがなされ、その一部は今日のオーサーズ・ウィングとして残っている。やがて19世紀末にはタイ王族やロシア皇太子などの貴賓も訪れるようになり、オリエンタル・ホテルはバンコクの社交生活の顔となってゆく。20世紀はじめには、のちにタイ民俗学の父と呼ばれるアヌマーン・ラチャトーンもこのホテルでクラークの仕事をしていたといわれている。その後第二次大戦中には帝国ホテルがオリエンタルの運営に携わっている（シンガポールのグッドウッド・パーク、ラングーンのスランドも同様であった）。

戦後のホテル再建に力を尽くしたのが1947年から10数年にわたってジェネラル・マネージャーを務めたジャーメイン・クルールであり、当時彼女はタイ・シルクの振興者として有名なジム・トムプソン、外相を務めたポート・サラシン、王族のプリンス・バヌなどとホテルの共同経営者の一員であった。その後建築、貿易事業に従事するイタルタイ社が経営権を握り、1972年以降は香港ランド（マンダリン・ホテルを経営）の資本が入り、マンダリン・オリエンタル・ホテルとなった。香港のマンダリン・グループの資本参加により、その一員となったが、オリエンタルが築き上げた雰囲気や個性はなるべく変更なしに維持されているという。その後1981年には合衆国の銀行業界の雑誌『インスティテューショナル・インヴェスター』によって世界一のホテルと評価され、オリエンタルの位置づけが定着してゆく。部屋数は約400ほどで、驚くべき最新設備もないが、いわゆる「タイ・ホスピタリティ」と呼び慣わされるサービスの質と、チャオプラヤー河に臨む立地、このホテルの軌跡を示す貴顕、著名人、文筆家の長大な訪問客リストの存在などによって、東南アジアのホテルのなかでラッフルズ（シンガポール）、E&O（ペナン）、ペニンシュラ（香港）などと並ぶグランド・ホテルの声価を勝ち得ている。

（2）ペニンシュラ・ホテル（香港）^{*22}

ペニンシュラ・ホテルは1922年に当時の九広鉄道九龍駅近くに開業した。このプロジェクトに関わった中心人物が、イラクのユダヤ系出身のカドゥーリー兄弟であった。兄のエリスは香港で瞬く間に商才を発揮し、中国電灯電気会社の主導権を握り、当時香港最大であったホンコン・ホテルの

大株主となる。当初同じくユダヤ系イラク人がの背景をもつサスン財閥で働いていた弟エリーは上海で活躍するが、兄の死後1928年に兄の創立した上海・香港ホテル会社の経営陣に加わり、その後は彼の子息が後継者となってゆく。カドゥーリー兄弟はフィランソロピストとしても知られ、多くの教育機関を設立し、慈善活動を行っている。ペニンシュラを経営していた香港・上海ホテル会社は、上海にアスター・パレスなどを経営、また北京のワゴン・リ・グランドの60%の株式を保有していた。

ペニンシュラも第二次大戦中は日本に接収され、東亜ホテルと名を変えて営業していた。日本軍による香港侵攻は12月に行われたため、香港陥落後のクリスマスは「黒いクリスマス」と呼ばれ、ペニンシュラが接収されたこともあり、ホテルにとっての暗黒時代とされる。戦後は国際的な雑誌やいわゆるジェット・セットのあいだで、オリエンタルと同様、ペニンシュラもきわめて高い評価を得ている。また香港の地元財界や行政関係者、ソーシャライトのあいだでもペニンシュラの人気は高い。改装やタワーの建築を経て現部屋数は300室となった。香港・上海ホテル会社は、香港の伝統的な財閥系のスイヤ・グループに属しているが、オリエンタルと同じくペニンシュラも、同じグループのフラッグシップ・ホテルとして、独自性を保っている。

いずれのホテルも今日ではホテル・グループに属し、系列ホテルをもつが、独特の雰囲気や個性を有し、唯一無二のホテルとされている。オリエンタルの場合、香港ランド（マンダリン・オリエンタル・ホテル系列）は運営会社であり、地主はタイ人である。両ホテルとも、地元のコミュニティとの関連が密接で、社会活動やフィランソロピーの面で地域社会にも貢献している。いわゆる東洋趣味も含めて建築、インテリア、食事、サービス等にローカルな要素をよくとり入れており、アジアとグローバルとの接点、あるいは融合が両ホテルの共通テーマとなっている。

4. ライフ・スタイルの研究

今回は特に物質文化の視点から、ホテルにおけるライフ・スタイルの初段的研究を行った。対象は客室内の備品、朝食のメニューに限定している。両ホテルとも部屋はスタンダード・ツインである。なおこの研究には大きな制約がある。ひとつにはホテル館内の調査はなかなか困難であり、自ら宿泊する方法を取った。しかし宿泊費がきわめて高額であるため、スタンダード仕様の客室のみの調査としている。

(1) 客室の備品

オリエンタルでは、40m²の部屋にデスク、その両側に椅子2脚、小型ソファ、コーヒー・テーブル、ベッド2台、絵画4点、花台1台、蘭の鉢植1個、生花と花瓶、ベッドサイド・テーブル2個、TV（シャープ）、DVD/CD（デンオン）、プレイヤーが備わっている。浴室はバス・タブとシャワールーム、トイレットが区切られ、ヘヤ・ドライヤー、石鹸、シャンプー、コンディショナー等は自前ブランドで蓮とショウガの香り、そのほかに入浴塩、タルカム・パウダー、髭剃りセット、洗剤、櫛、歯ブラシ、歯ミガキ等通常のアメニティが備えられていた。タオル（3種）およびバス・ローブ、スリッパは当然用意されていた。

デスクの引き出しには、通常の便せん、封筒、絵葉書に加え、ハサミ、スティックのり、クリップ、ステイプラー、ポストイットなどの文房具がそろえてあった。ミニ・バーの中身は、ウイスキ

ー（ジョニーウォーカー12年黒中瓶）、コニャック（ヘネシーVSOP中瓶）、ラム（バカルディ小瓶）、ウォトウカ（スミノフ小瓶）、ジン（ゴードン小瓶）、赤ワイン（シャプティエール・コート・ドゥ・ローヌ中瓶）、ビール（シンハ、アサヒ、ハイネケン）、ミネラルウォーター（エヴィアン・ペリエ、ミネレ）オレンジ・ジュース、アップル・ジュース、ヴェジタブル・ジュース（いずれもスプリング・ヴァレー）、ウーロン茶、緑茶（いずれもポッカ）、コカ・コーラ、ダイエット・コーラ、スプライト、ジンジャー・エール、ソーダ・ウォーター、トニック・ウォーター（いずれもシユヴェップス）、ソーダ・クラッカー、シリアル・バー、ミント、チョコレート・バー、各種チョコレート（フェレーロ、ロビエルなど）、ポテト・チップス（ケトル）、ミックス・ナッツ（サンキスト）、ピスタチオ（ブルー・ダイヤモンド）、ビタミンC錠剤、オリエンタル・ホテル・グッズ（絵葉書、タイ料理レシピカード）となっていた。

さらに室内に置かれた雑誌は、『タイランド・タトゥラー』『オリエンタル・ホテルブック』『タイランド』といずれも旅行やレジャー、タイの紹介誌と、週刊誌の『タイム』であった。またDVD/CDプレイヤーの側にロッド・ステュアートのCD（『グレート・アメリカン・ソングス』）とクラシック音楽のアンソロジー、タイ・ポップのCDが置かれていた。

オリエンタル・ホテルの備品から特別の「ライフスタイル」を連想するとか、こうした品目の取り揃えによってホテルがどのようなライフスタイルを提案しようとするのか、実はよく分からない。いわゆるブランド製を強調するのなら、ブルガリやヴェルサーチがプロデュースしたホテルのように徹底的にそうした品物を、たとえばアメニティとして提供すればよい。ミニバーの中身はとくに高価・上質というわけではなく、ごく普通の、しかしそれぞれはなんら劣ったところのない標準品といえる。筆者が調査を行った部屋が、ごくふつうのスタンダードであったから、といえそうかもしれないが、こうしたまっとうな品物、備品（たとえばタオルはきわめて上質だがブランドではない）あるいは家具、付器もそれなりにしっかりしているが、ほとんどがタイ産品となっていた（ちなみにベッドはシモンズ）。ホテルが無償で提供するコムプリメントとしては、毎日取り換えて違った種類が供されるフルーツ・バスケットの果物、タイ製のミネラル・ウォーター、日刊新聞、インスタント・コーヒーやティー・バッグ、砂糖、クリーム（mLのダーズリン茶、ジンジャー・トゥウイスト茶、ジャスミン・ミスト茶、山本山のせん茶など）があった。また先に記したように石鹸やシャンプーはタイ企業が生産するホテル・ブランドで、趣味のよい、素朴なテイストの意匠の容器に入っている（これらはホテル・ショップで売られている）。

こうしたことを考え合わせると、いわゆるブランド品の羅列による自己主張とはまったく逆のライフ・スタイルの提示がまことに見事に行われていることに瞠目せざるをえない。ホテルの外観からインテリア、客室とその備品まで、客をわずらわせず、妨げないにもかかわらず、近く寄り添うような配慮が行き届いている。ホテルの絵葉書や出版物、クッキーやジャム、グラスや食器、リネン類、Tシャツなどホテルのグッズを販売するホテル・ショップに典型的な自己ブランド化、そして訪問した貴顕、著名人の数を誇示するような自己伝説化の行きすぎには辟易するが、そうした弊を感じることの多いグランド・ホテルのなかで、オリエンタルは程の良いほうであろう。一定の控えめな調子がこのホテルのさまざまな面に潜在している。ホテルが所在するバンコクは東南アジアを代表する巨大都市であり、東京以上の海外からの来訪客を誇るが、後述する香港がもつコスモポリタニックな雰囲気やダイナミズムと比較すると、「素朴」「周辺」であり、逆にその美点はこの都市

を象徴するオリエンタルによく示されているのではなかろうか。

さて客室の備品についてペニンシュラはどうであろうか。部屋の面積は50m²でオリエンタルより広く、入り口に近い部分（収納、浴室、手洗い）と寝室のあいだにドアがあり、客室は2つの部分に分かれている。部屋が広い分、家具も大きく、種類も多い。デスク、ライティング・ビューロー、コーヒー・テーブル、ベットサイド・テーブル2、電話3カ処、椅子2脚、ソファ、ファックス、造り付けでない箆笥2、中国風陶器のランプシェード、TV（サムソン）、DVD/CD（ソニー）が備わっており、そのほかに雑誌（ロンドン・イラストレイテッド・ニュースとオリエン特・エクスプレス・ホテルが発行する『スフィア』誌、カルフォルニア州のクエイル・ロッジ発行の『クエイル』、『タイム・アウト・ホンコン』、『シティ・ライフ』、『ホンコン・タトゥラー』、『ウェア』、『カルティエ』、『ザ・ペニンシュラ』、『タイム』）と新聞（『サウスチャイナ・モーニング・ポスト』および『インターナショナル・ヘラルド・トリビューン』の2紙）、CD（アバド指揮ロンドン交響楽団によるラヴェル、そしてソニーク）が置いてあった。

ミニ・バーには、シャンパーニュ（ブリュット）、赤ワイン（シャトー・ドゥ・マルサン）、コニャック（ヘネシーVSOP）、ジン（ボンベイ・サファイア）、ウォトウカ（アブソリュート）、ウイスキー（バラントイン）、ウーロン茶（ロビフ）、ミネラル・ウォーター（エヴィアン、フィジー）、ポカリ・スウェット、ペリエ、アイスティ、V8、トニック・ウォーター、ソーダ・ウォーター、ジンジャー・エール（いずれもシュヴェップス）、ビール（ハイネケン、キリン、サン・ミゲル）、コーク、ダイエット・コーク、セヴン・アップ、ミックス・ナッツ（プランターズ）、テラ・エキゾチック、野菜チップ、ペニンシュラ・クッキー、ミックス・ジュース、オレンジ・ジュース、アップル・ジュースが用意されていた。部屋にある果物皿はヴィルロイ・アンド・ボッシュで、箆笥など中国家具らしいものであった。ベッドはシモンズ製である。

浴室の備品は、種類においてはオリエンタルとさほど変わらないが、おそらく顧客の性別によって私の場合は、シャンプー、コンディショナー、ボディ・ローション、バス・ジェルは、ロンドンの男性理容室として有名なモルトン・ブラウン製であった（女性客の場合は、ティファニー製品のようである）。これらの製品は天然素材を主に使用し、健康志向と環境への配慮を重視しており、また十分に新しさを持つ商品である。石鹸はダヴィであり、これはワイン生産で有名なR・モンダヴィの一族の製品で、これもエコ・コンシャスといわれている。浴室のアメニティから判断すると、ペニンシュラはオリエンタルよりも現代のトレンド・セッター的なブランドに敏感であり、旧き良き「ゆったりさ」よりも、周囲に神経を研ぎすます「感受力」を強調している。ここには香港という都市のあり方も反映しているであろうし、両社のサービスの方向性の差もあるだろう。またいずれのホテルも都市リゾート的な性格はもっているが、ペニンシュラのほうがビジネス客の割合が多いように感ずる。

（2）朝食のメニュー

家庭での朝食はどちらかというと短い時間でそそくさと食べ、メニューも不定形な組み合わせのことが多い。前日の残りものということもない訳ではない。それでも昼・夕食と較らべると朝食は決まりきった定式に準拠することが多い食事といってよい。ホテルでの朝食は、食物の内容や組み合わせだけでなく、テーブル・セッティング、食器、サービスする人の存在、食堂やテラスの環

境といった食事の「儀式化」を促す要因が揃っている。昼・夕食のコースのように第一の皿、第二の皿、やがて食後という節目で区切られた全体の流れと比較すると、朝食の場合、そうした分節化の度合いは低い。とはいえ、食物がすべて一度に卓上に並らぶことの多い家族での朝食とは違い、サービスされる朝食には多少のパンクチュエーションが存在している。この点を考えると、ブフェ形式の朝食は儀式的リズムと過程を欠いているのかもしれない。

いずれのホテルの朝食の内容を見ても、いわゆるアメリカ式、大陸式のメニューとともに、健康志向、低カロリー、低脂肪の朝食メニューが用意され、それらに加え、ローカルの朝食および日本式朝食もメニューに含まれていた。ホテルの朝食が新しい生活様式を積極的に牽引しているとはまではいえぬが、少なくとも現在の朝食をとりまくトレンドと多様性について大方満足のいく水準を呈示していると思われる。両ホテルともこうした点については、顧客層を完全に絞り込んだ趣味、嗜好重視のブティック・ホテルや小規模・高級リゾートとは違い、あくまで従来からの定式に加えて新しい形を採用する、折衷型のトレンド設定といえよう。しかしながら客室（とくに浴室）の備品に現れたペニンシュラとオリエンタルの差異は朝の食卓では顕著ではなく（すなわち外部ブランドを採用することでライフ・スタイルの最新化を図ることはなく、しかし例外はオリエンタルでマリアージュ・フレールの紅茶がメニューに入っていることにとどまる）、両ホテルとも朝食に自社ブランド・イメージとそれぞれの物語性やナラティブを付与する方向性が確認された。朝食は顕在的なイメージ競争を行う媒体として適切でないのかもしれない。ある種の「保守性」というのか、朝食は新奇をてらうよりも、むしろ回顧的かつ反復的な行為であるかもしれない。これは朝食がファスト（断食）をブレイク（破る）という通過儀礼的な性格をもっていることを考えると、矛盾のようにも思われる。けれども断食から食への移行はふつう、身体、生理的に徐々に行われ、また朝の時間は「新しい始まり」ではあるが、一日に備える慌しくも静かな瞬間であることを考えれば、朝は一定程度の範囲内に秩序づけられた時間であり、空間についても同様な秩序づけの対象となろう。

日常生活の「儀式化／形式化」という観点から二つのホテルの客室、朝食について検討してきたが、それはホテルにおける「快適さの形象化」といってもよい。客室における家具、ベッド寝具、バスローブ、スリッパ、バス・タブ、シャワー設備、空調、照明、アメニティ、花、絵画、ミニ・バー、フルーツ・バスケットなどの設備・備品、そして客室サービス（バトラーも含む）、プライベート・チェック・インの有無（同一ホテルでも客室や顧客のステイタスによるが）、さらにホテル内のより公共的な空間、たとえばロビー、レストラン、バー、図書室、プール、フィットネス／ヘルスセンター、スパなどの施設、そしてビジネスやコミュニケーションに対応するためのビジネス・センター、客室内のITならびに電子機器の充実度、これらすべてがホテルのライフ・スタイルの快適性と、そして何らかの行動形式と関わっている。

両ホテルのチェック・インを比較するとつぎのようになる（高額なホテルのため、この調査期間中にそれぞれのホテルで1回ずつしかチェック・インしていない）。オリエンタルでは正面入り口のドアを入ると、複数のスタッフからタイ式のあいさつ（ワイ）を受け、ジャスミンの花飾りを渡される。受付に到着を告げると、すぐに掛員が部屋まで同行し、そこでチェック・インの手続きを済ませる。この一連の過程はスムーズに、まさに「タイ的」なサービスの洗練さ、というコンセプトでまとめられている。客室には担当のバトラーがおり、受付階のエレベーター・ボーイが殆どの時間、乗降の世話をする。

これに対しペニンシュラの場合は、サービスに巧みな距離が保たれている（何回も述べるが、客室や顧客のステイタス等によってこの点は大きく違うように感じられる。しかし逆にグランド・ホテルの本懐くときに建て前だが>とは、そうした区別をしないこともあろう）。体験をそのまま記述すれば、ベル・ボーイの行き届いたサービスで受付まで到着したところ、運悪くホテル創立80年記念キャンペーン・ツアーの日本人団体客への対応で受付が混乱していた。しばし待つが、順番の列そのものも定かでないため、その旨を伝え善処を求めた。ようやくチェックインを完了、すぐに受付のヴェテラン・スタッフが客室まで同行し、時間はかかったが無事入室となった。

限られた経験にもとづく印象から判断するのは研究上意味のないことと承知の上でいくつかコメントするなら、つぎのようになる。たまたまの混乱であろうが、オリエンタルでは客の到着がしっかり把握され、予期されている。客室でのチェック・インやバトラーサービスは当然パーソナルな感覚を強調しており、ホテル内の従業員からのあいさつも頻繁に繰り返される。しかしながらそれらは客のプライバシーを侵害するものではなく、あくまで客と迎える側とのあいだの公共的ホテル空間のなかでのコミュニケーションとして形造られる。

ペニンシュラの場合、たまたまであろうが、客はほとんど予期されておらず、予約リストから探し出すまでに時間がかかっている。また団体客の到着で混乱したなかで、それ以外の客に適切に対応することもなされなかった。そのため、この点だけをとりあげればペニンシュラはグランド・ホテルのスタンダード失格かもしれない。オリエンタルのサービスや装飾に「タイらしさ」が強調され、また客の側からもそうした構築された「タイらしさ」にすぐ気付くのと違って、ペニンシュラでは随処に「中国的」な意匠はあり、従業員の殆どは「中国系」であるにもかかわらず、サービスと「民族性」や「国民性」との結びつきは形象されにくい。ホテル内の中国料理レストランであれば女性従業員の中国服（旗袍）によってステレオタイプ的な形象化が行われる。比較の問題ではあるが、むしろ極端なエキゾティシズムを表現しないところに「香港性」が表現されているのかもしれない。

以上のほか両ホテルとも、健康志向のライフ・スタイルを呈示するフィットネスおよびスパのプログラムや、文化伝統や教養のスタイルに触れる文化プログラム（習字、美術鑑賞、料理）を各種取り揃えている。

前にも記したようにいずれもアジアのグランド・ホテルとして長い歴史を持つホテルであることから、自己のブランド化、自己参照性がきわめて強いホテルである。パンフレットや記念出版あるいはホテル側の発言などからそうした例をひろい出してみよう。

オリエンタルは自らを「伝説」と位置づけ、しばしばそのサービスを「タイ・ホスピタリティ」の精髓とする。また自らの「歴史」が自らの「未来」であるともいう。『アンナとシャム王』の原作者アンナ・レオンオーウェンズの子息ルイスは母親がタイを去ったのち、タイ国でチーク材取引に従事、晩年オリエンタルを友人数人とともに買収し、部下に経営を委ねたという。このホテルは、まさにタイ王国と西欧の邂逅の中心的なナラティブ（『王様と私』）をそのまま体現したところがあり、その後の経営陣の移り換わりを見ても、多年にわたって東西のインターフェイスの役割を果たしていた。1980年代の後半タイ経済が発展を始めるまで、オリエンタルは上に述べた融合性や中間性を象徴する場所であった。タイ王国はたしかに欧米列強の植民地にはならなかったが、オリエンタル・ホテルはその名称・歴史・雰囲気の中でやはり「コロニアル」な様相を刻印されていたので

ある。ところが1990年以降のタイ経済の更なる発展（途中通貨危機や経済不況による頓挫はあったものの）を経て、社会が「成功」をおさめてゆくと、いっぽうではグローバルな繋がり（経済や観光）が深まるものの、歴史・文化的な自己言及や自己満足が高まっていった。「タイ・ホスピタリティ」や「タイ・ウェイズ」が過剰に強調され、オリエンタル・ホテルでもそうしたステレオタイプの「タイらしさ」の押しつけが以前よりも強くなりつつある（あるいは自己防衛としてこうした方向性をとらざるをえないのか）。文化を超え、国境を横断するホテルが根本的にもつ「非国籍性」や「無国籍性」に影響が及ぶようであるとオリエンタルの良さは失われてしまうが、そのバランスはいまだに保たれている。

ペニンシュラでも自らの伝説化は行われている。自らを「アジア的なもてなしの聖なる伝説」と呼んだ。しかしながらオリエンタルがその最初の創業時の歴史が不鮮明であり、経営陣もしばしば入れ替わったのに対し、ペニンシュラは創業家のカドゥーリー一族が大なり小なり経営に関わってきたために、むしろ企業体としてはっきりした歴史性をもっている。すなわちオリエンタルが「タイらしさ」や「タイの伝説」といった出自を持ち出すのに対し、ペニンシュラは創業当時から香港の将来に自信をもち、確かな展望を持った人びとによる「夢と発展」の輝かしい歴史なのである。こうした点はバンコクと香港の歴史感覚の違いでもあろう。ここではホテルの雰囲気やあるいは風格・風情に繋がる話題について触れた。こうした「曖昧」で「無定形」な対象をどのように視角化したり、可視化するかは本研究にとってきわめて大きな課題である。これについては方法的に早急に検討したいが、量的な把握はもとより不可能であり、どのような変換を通してエスノグラフィックに表現可能かを追究してゆきたい。

ふたたびオリエンタルとペニンシュラの両ホテルに戻るが、劇場的な空間でもあるホテルにとってドレス・コードはかつて厳格であった。しかしながら社会のドレス・コードが緩和されるにつれて、エクスクルージブなホテルにおいても、コードは緩められてきた。ちなみにペニンシュラの規則は、「公の場所で、ランニング・シャツ、スリッパ、バス・ローブ、身体の出るヒラヒラした服を着用しないこと。レストランやバーでは短いズボン（ショーツ）は適当ではないこと。」であり、オリエンタルでは「夕方6時以降（ノルマンディ・グリルとロード・ジムでは終日）は公の場所にサンダルで出入りしないこと」となっている。生活全般で、多くの場合かつての「正装」が後退し、「スマート・カジュアル」という特定しにくい「略式装」へと変化した現在、ホテルのドレス・コードも大きく変わらざるをえない。さまざまなコードや取り決め、いや暗黙知も含めて、社会や顧客のあり方が現代のように多様になると、グランド・ホテルの従来の格調や雰囲気（実在するとして）を維持してゆくのは容易ではない。また実際に一様な価値を体现するにはホテルそのものが巨大になりすぎ、顧客のニーズも千差万別になってしまった。こうした背景があるからこそ、過去の回想や自己言及がひとつのアイデンティティ確認の拠り処となるのであろう。

おわりに

親に連れられて出掛けたホテルは「ハイカラ」（祖母の言）で「ちょっと緊張する」場所であった。ライト設計による旧館がまだ建っていた時代のことであるが、今日になってもその印象はさほど変わっていない。ホテル（といってもその中身は実に多様であるが）には大きな魅力を感じるとともに、相性や当たり外れ、また程の良さ、そして逆に少し背伸びしたい時など、対応し、利用す

るうえで結構難しいこともある。不定形でとりとめのない問題群や視角からホテルをできるだけ適確に把握したいとする、この試みは未だ方向性といい、理論的な確度といい、いや単純な事実や情報の収集すら十分ではない。文芸的ジャンルが描くホテル（A. ブルックナーの『秋のホテル』のように、さまざまな人生の節目を体験している人と人が出会う場所であり、そこに接近や離反が生ずる舞台の役割を果たす）が「書かれた」ホテルとしてもっとも完成度が高いのであろうか。ホテルを把握・理解するうえで有効な方法と話法について、さらに追及を深めたい。

今後の研究を進めるうえで、つぎのような課題が残った。

1. ホテルが生活を儀式化／形式化するという仮説をさらに検証するために今回は部屋の備品、朝食のみを対象とした。この点について、さらに徹底した調査を行うとともに、パーティ、レセプションなどの行事、フィットネスやスパなどの施設などについても検討することが望ましい。
2. グランド・ホテルに共通する自己言及性、伝説／歴史化、自己ブランド化の大部分は言語を媒介として行われる。そのほかに建物や記念碑などの物の存在も同様の機能を果たす。こうした点に関わる言語表現および物的存在をホテルのパンフレット、出版物等から収集・分析すること。
3. ホテル関係者、有識者などに対する集中インタビューはまだ殆ど手つかずのままである。
4. 文献研究の展開として、宮廷社会→近代ブルジョワジー→現代のテイスト／ブランド社会という変遷のなかで、ライフ・スタイルの変化と連続性を見きわめるために、とくに近代ブルジョワの生活様式に関する文献研究を強化する必要がある。
5. 「雰囲気」「たたずまい」「格調」「安らぎ」「くつろぎ」「心地よさ」など、はなはだつかみにくいコンセプトや表現がホテルという存在をとりまいている。それらをどう可視化できるのか。「安らぎ」を参与観察を通して明らかにするとはどういうことなのか。こうした理論的枠組みの研究が残されている。

* 1 この小稿は、平成20年度アジア・日本研究センターからの研究補助を受けた研究プロジェクト「公共空間としてのホテル——アジアのグランド・ホテルを中心に」の研究経過報告である。ご援助を下された同センターの関係諸氏に深く感謝申し上げるとともに、この研究プロジェクトに助言を戴いた同僚諸先生にも御礼申し上げます。なおこの研究プロジェクトについては、平成20年7月5日と11月15日に研究会を開催している。その際に参加された方々にも篤く御礼を申し述べたい。また実地調査のうちにコメントを戴いたキティ・リムサクン（チュラロンコン大学）およびシドニー・チェン（香港中文大学）の両氏にも感謝する。

* 2 こうした出版物に共通するのは、本来自由かつ自在である筈のホスピタリティや豊かさが、それがビジネスと結びつくことによる限界はあるにせよ、きわめて硬直して押し付けがましい点にある。この小論で筆者が目指す人間行動の「形式化」や「儀式化」には、たとえばドレス・コードや食卓のマナーのようにいっぽうで行動を律する面もあるが、ホテルという公共空間でより闊達に社交やコミュニケーション、くつろぎが可能になるための交歓の回路の意味あいもある。

* 3 ノルベルト・エリアス（波田節夫、中埜芳之、吉田正勝 訳）『宮廷社会』叢書ユニベルシタス、法政大学出版局、1981年。

- * 4 エリアス、1981年、130頁
- * 5 同上、131頁
- * 6 同上、131頁
- * 7 同上、131頁
- * 8 同上、131頁
- * 9 同上、66頁
- * 10 W. ゾンバルト（金森誠也訳）『恋愛と贅沢と資本主義』論創社、1987年。
- * 11 Y. ロートマン（桑野隆、望月哲男、渡辺雅司訳）『ロシア貴族』筑摩書房、1997年、117頁
- * 12 同上、119頁
- * 13 同上、119-120頁
- * 14 同上、120頁
- * 15 E.R.Leach, 'Ritualisation in Man' in S. Hugh-Jones & J.Laidlaw (eds.) "The Essential Edmund Leach", pp.158-164 として 'The Cult of Informality' in *ibid.*, pp. 186-193
- * 16 ミシェル・フーコー（田村淑 訳）『監獄の誕生——監視と処罰』新潮社、1977年
- * 17 同上、147頁
- * 18 同上、147頁
- * 19 同上、147頁
- * 20 N.S. ハイナー（田嶋淳子訳）『ホテル・ライフ』奥田道大・吉原直樹（監修）シカゴ都市社会学古典シリーズ No. 1、ハーベスト社
- * 21 バンコクのオリエンタル・ホテル（マンダリン・オリエンタル）についてはAndreas Augustin & Andrew Williamson "The Oriental Bangkok" in the series of the most famous hotels in the world., 1996および"The Oriental Hotel Cookbook"; Text by W. Warren, Photography by L. I. Tettoni, Recipe by N.Kostner, Editions Didier Millet, Bangkok. 2006を参考にしている。
- * 22 ペニンシュラ（香港）については "The Peninsula-Portrait of a Grand Old Lady" Foreword by J. Morris, Text by F. Bartlett, Roundhouse Publications LTD. Hong Kong 1997を参考にしている。